



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

理想郷の伝承と歴史

著者	赤田 光男
雑誌名	社会科学
号	47
ページ	259-274
発行年	1991-08-28
権利	同志社大学人文科学研究所
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000008002

理想郷の伝承と歴史

赤 田 光 男

はじめに

日本の民間伝承には、この世が今よりもはるかに豊かで、満ちたりた世界になることを願う儀礼がある。たとえ一月七日前後にある山の神祭りの際、日本全国の金銀財宝、糸織いとばたはすべてわが村へどっと集まるようにと、唱え言葉を唱えながら鈎引き神事をする所がある。黄金あふれる理想郷の現出をひたすら儀礼や信仰によって招来させようとする行為の背景には、理想郷を仲々実現させてくれない政治に対する批判も込められているのであるが、これを毎年毎年くりかえして行うことによって、実は村落共同体、家族共同体の求心的結束力が形成され、その力が村や家を動かしてきたといえる。

たしかに村や家は前進、発展してきたが、夢のような理想的世界は実現しない。せめて死後、理想的世界に住みたいという願望も一方には存在していた。死後の安楽世界での生活は、今生とは格段の差で展開すると信じられた。衣食住満ちたりた不老不死の桃源境のイメージは民俗、仏教、道教の思想の中に描き出され、これを信じて庶民はこの世を精一杯生き抜き、死後の楽しみに思いを馳せた。

本稿では、この世での理想郷現出のための儀礼や信仰、さらにこの世のどこかにあると伝えられている理想郷や死後行くと信じられている理想郷のそれぞれのイメージを、伝承や文献によって分析し、日本人の夢の思想を考察してみたい。

第一章 初春の夢

十二月末から一月中旬にかけて、「年越し」と名のつく日がある。大晦日年越し、六日年越し、十四日年越し、節分年越しの四つの年越しである。この四つの年越しは、それぞれ大正月、七日正月、小正月、立春の前日にあたり、大晦日から大正月、六日から七日正月、十四日から小正月、節分から立春が、大きな年のあらたまる節とみなされていたことが明瞭である。年越しとは、新しい年に世が改まる境界時間を示す言葉であり、何故かくも新年早々に世改めを欲したのか問題となるところである。実は年頭において、筍の皮をはぐように何度も年を再生して、夢の理想郷が到来することを願った日本人の世改め思想と結論づけることが出来るであろう。これら年越しの日には、邪霊、悪神を追除し、ケガレを祓い、神仏諸霊を祀る行事が広く見られる。この世をより良い世界に聖化する儀礼である。そして、特に注目されるのは、夢占いであった。

初夢は(1)節分夜初夢、(2)大晦日夜(除夜)初夢、(3)元日夜初夢、(4)二日夜初夢の四類型がある。初夢で来る世の吉凶禍福を占うわけだが、先の年越し観念と比較してみると、大晦日年越しや節分年越しの夜の夢こそが、新しい世の到来する前夜の夢として、もっとも重視されていたと考えられる。元旦や立春の朝に目覚めたときに余韻として残る夢に、新しい世の吉凶を探った。元日夜初夢や二日夜初夢は二次的所産といえよう。

さて、初夢は漫然と見るのではなく、積極的に良い夢を見るべく、呪術的工夫がなされた。すなわち「宝船」と称

する七宝満載の絵船を節分や大晦日の夜に枕下に敷いて眠る工夫である。近世では米俵や宝貨を載せ、七福神が一同に会してこの世に船で到来する絵が人気を呼び、「オタカラ、オタカラ」と呼びながら市中を売り歩く宝船売りの姿も見られた。しかし、この風習以前には別の様相が展開していた。

折口信夫によると、室町時代から宮廷や貴族の間で、除夜か節分の夜に船の画を床の下に敷いて寝る風習があり、翌朝には集めて流すか、埋めるかしており、このことから、この船は悪夢を積んで去るものと考えられていたという。さらに折口によれば、荒っぽい船の中に稲を数本書き添えたものが、一番古いものであり、この船に悪夢を積んで追放したという。室町時代には「節分御船」などといわれ、「宝船」という名称はなく、またその船に「獺」という字を描いたものもあり、悪夢を喰うための「夢違ひ獺の符」であったという。つまり船に悪夢を全て積んで追放したあと、心安らかに元旦あるいは立春の朝の夢を見たのだと折口はいう。悪夢を追放すべき船が、のち米俵を積んだ船、さらに七宝類を載せた船、そして七福神が乗り込んだ船へと変化し、宝の入り船となったと主張した。⁽¹⁾ 要するに、除災のための船から招福のための船へと変化したことになる。

除災をして理想的世界の到来を願う理念と、招福をして理想的世界の到来を願う理念とは、明らかに理想郷希求に対する態度が異なる。近世に一般化する招福のための「宝船」は、近世人の理想郷待望思想が一段と昂揚したことを如実に示したものといえよう。

ところで、近世社会では具体的にどのような「宝船」に関する儀礼がみられたであろうか。関西では節分の夜に画船を敷いて眠る節分夜初夢の風習が一般的だった。延宝五年（一六七〇）稿の『日次紀事』⁽²⁾の節分の項には次のような記事がある。

若年内有節分、則其夜 禁裏被撤熬豆於 殿中、而逐疫鬼。在春亦然。今夜撤大豆、謂拍。同夜 禁裏貼画船於白紙、而賜 宮

方及諸臣。地下良賤亦画船、以敷臥榻之被底寢。今夜有吉夢、則來歲得福云。若見惡夢、則翌朝付是於流水。是謂流惡夢。倭俗、斯船内画種々珍宝。故称宝船。近世、是亦鍔梓而兒童売市中、大呼宝船々々。是又中華紙船之類乎。

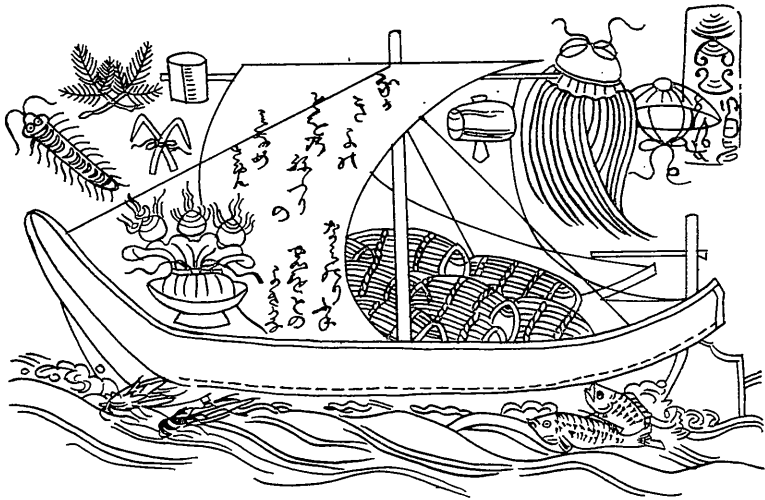
正月になる前の年の暮に節分がめぐってくる場合がある。閏年は一年十三カ月だから、旧臘末に節分、立春を迎えることがあった。年内節分、年内立春とはそのことである。この場合、当年には節分や立春がまったくなくともある。そういう年は不作の年として不吉に思われた。このことについて、文化三年（一八〇六）刊の『諸国図会年中行事大成』⁽³⁾巻之一には

正月朔日より前に立春あるを年内立春といふ。又除日立春といふ。当年の立春去年ありて、来年の立春は来春正月にある時は其年立春なし。是を空穂年といふ。

空穂年とは稲の稔りのない年、不作の年という意味であり、立春は年頭にあることが尊ばれた。年内立春、年頭立春いづれにしても、その前夜には禁裏では熬豆^{いりまめ}を殿中に撒いて疫鬼を追除した。また画船を白紙に付けて官方諸臣にも贈った。庶民は画船を臥榻^{がとく}すなわちしとねの底に敷いて寝た。吉夢であれば来る世に福を得、もし悪夢だと立春朝に画船を流した。悪夢を流す意があると記すから、中世的な古い信仰が生きていることがうかがえる。船内には種々の珍宝が描かれ、宝船と称し、また鍔梓^{せんし}すなわち木版刷りの宝船を兒童らが市内を売り歩く姿も見られた。宝船の画の内容は近世的な招福の意味あいが強くなっているが、悪夢流しの風習も存在していたことは中世的信仰の残影といえよう。

京都では五条天神社の宝船が人気を博した。五条天神社は下京区天神前町にあり、近年のビルラッシュでその所在も仲々判然としないほど小境内地となっている。神主も常任せず、町民の記憶にも戦後に宝船が授与されたということはないらしい。幸い昭和十八年に刊行された本山桂川著の『日本民俗図誌』⁽⁴⁾第四巻に収められているのが、図1の

図1 京都五条天神社の宝船



当社の宝船である。『日次紀事』には節分の日に五条天神社に参詣して菓草のオケラを買って自家でこれを焼くことや、社の傍の勝軍地蔵から勝餅しょうもちを買って帰り、夜にこれを食べれば来る年は勝利を得るということを記しているが、宝船を買うことは何も記していない。しかし、享和元年（一八〇一）頃の記録になる『橘窓自語』（5）には

五条天神今松原通西河原西南角の神宝は、金のたから船なるよし、天明の大
火災の時、動座させ奉りしこと、町家菊屋権兵衛語られしと、
中野能充物語せり、この天神は少名彦の神なり、例年大晦日節
分等に、たから船の画を出せるを、人々請受けて守とするをお
もへば、御神の御影の心にやあらん

とあるから、大晦日夜年越しや節分夜年越しの日に、宝船が授与されていたことが明らかである。この宝船が図1であることは確実で、一説には日本最古の宝船といわれるが、その正否はともかくも、極めて呪術宗教性の濃厚なものである。帆の左手上方には蜈蚣むかご、宝鑰ほうやく、松、柄杓が描かれている。蜈蚣は多足で、その異様な姿から霊虫とみなされ、また福神と信じられ、これを家で飼うと富を得るといふ信仰があった。

宝鑰は福德を掻き集める鑰かぎである。この二つは洛北鞍馬寺の初寅の縁日に實際参詣人に売られた。鞍馬は草深い山中にあり、蜈蚣も多く、また山中の福等木ふらうぎで宝鑰を作つて売つた。このことについて、『日次紀事』には

(初寅)
此日鞍馬士民以福等木作鑰、以売之。是謂福德搔。搔取福德之謂也。又売生蜈蚣。是謂御福。蜈蚣多門(聞)天之所使令者也。凡鞍馬山中不養鷄。言鷄好食蜈蚣之故也。

とある。宝鑰は福搔、生蜈蚣は御福と称されて、福德を追い求める人々に買われて行つた。『日次紀事』には、一石清水八幡宮に参詣する途次に行路で柑子を拾うと福を得ること、清水寺に参詣する時に白箬を拾うと祥瑞とみなすこと、と共に鞍馬に参詣する途中に蜈蚣を見ると福を有するようになることを記している。鞍馬の蜈蚣は福を招く神として信仰されていたわけで、それが鞍馬寺の本尊多聞天(毘沙門天)の使令とみなされていた。多聞天は北方守護の武神であり、わが国では七福神の一として数えられている。これは右手に宝棒、左手に宝塔を持つことから、福神のイメージが形成されたものと考えられる。多聞天が福神であり、それがこの山中に多い蜈蚣ともみなされたわけである。では何故、鞍馬寺とはまったく関係のない五条天神社の宝船に描かれたのであろうか。それは蜈蚣や宝鑰が鞍馬寺だけの福を招く象徴物ではなく、当時一般に浸透していた民間信仰と考えるべきであらう。蜈蚣崇拜は蛇や亀などと同様、異形の生物を崇拜するアニミズムの系列に属するものであり、またカギは今も各地の山の神のカギ引き神事の中に生きている。民間信仰を土台にして、五条天神社の宝船の絵は出来上つたといえよう。

松は神を招く聖樹である。蜈蚣、宝鑰、松の三種は右にみるように、福神そのもの、ないし福神を招く採物であるが、ただそれだけではなく、悪霊悪神を防禦、追除する象徴物とみなされていた。蜈蚣の口、宝鑰や松の先端の鋭利さは魔を払うものと信じられていた。魔を払い、福を招くために、この三種が画題に採用されたのだらう。柄杓は水や酒などの豊潤性を象徴するものである。

帆の右上方には小槌、蓑、笠が描かれている。槌は打出の小槌であり、何でも自分の意の如く望みの品が出てくる呪物であり、鬼の持物であり、また大黒天が米俵の上に坐わり、左手に大袋、右手に小槌を持つ姿としてよく知られている。蓑、笠は天狗の隠蓑、隠笠の伝承に代表されるように、これを着けると身が隠れる、変わるという理念があり、そのことから一揆などの世直し行動の時には、しばしば着けられた。ただ変装、変身するための手段としてだけではなく、これを着けると、わが身以上の霊力が得られる、つまり超人間、神人、神ともなれるという信仰があった。だから日常性の打破と理想郷現出のための行動には蓑、笠が採用された。打出の小槌、蓑、笠は総じて今の世を変えるための象徴物であり、理想郷現出のための道具であった。宝船に描かれたこれら三品は、まさに世直し思想を示すものとして注目される。

以上、宝船の上方に描かれたものは、理想的な世、豊かな世を到来させるためのものである。これらのものによって出現した世は船内や船べりに描かれた品々で象徴されている。すなわち宝船の前部には如意宝珠、金囊、後部には米俵が描かれている。金銀財宝や米が豊潤にある社会であり、また海老や鯛などの海産物が豊漁である社会が理想郷であった。ささやかなユートピア思想が五条天神社の宝船に描かれているのである。

帆に記された和歌にも注目される。「な(長)かきよ(夜)の(遠)とをのね(眠)ふりの(音)みなめ(目)さめ(覚)な(波)みのり(乗)ふね(船)のを(音)との(奥)よ(息)きかな」と記されている。長い夜の熟睡もすっかり目覚め、波にいざよう船の音が何ともこちよい響きをするなどという意であろうが、この歌は良い夢を見ようとする誘導の歌であり、また良い夢を見た結果を示す歌でもある。吉夢がいかにか尊ばれていたかを物語る歌である。夜は世であり、今まで続いた長い世から解放されて、理想的世界が到来することを願う歌でもあり、また到来したことを告げる歌とも考えられる。一種呪文めいた響きをもつ歌である。

五条天神社の宝船は、京都の公家、三条家でも採用されていた。安政二年(一八五五)に記された『三條家奥向恒

図2 京都鞍馬寺の宝船



例年中行事⁽⁶⁾の節分行事の項には、「五条天使」すなわち五条天神社へ青土が使いに行き、「御札一枚・宝船一枚・おけら七ツ・かや七ツ・かちくり七ツ・せう^(勝)のふもち七ツ^(餅)・あめ七ツ・こんふ枚」の八品を受けてきている。これを「奥御一の間御床」の上に納置した。一方、三条家には禁裏から授与される「たから船」もあった。三条家の御所様(当主)やその家族には杉原すりの宝船、奥向(奥御殿)に仕える老女たちには半紙すりの宝船が授与された。「御寝のとき御所様御はしめ杉原すりの御宝船を御枕の下に御敷遊す。天使の宝船へ御札と一所ニ御床ニ納置事。老女はしめ半紙すりの宝船一枚つゝいたゞき、各枕の下ニ敷へき事也。」とあり、枕の下に敷いて寝る宝船は禁裏よりの宝船、奥御一の間御床に飾る宝船は五条天神社の宝船というように、使い分けをしている。

鞍馬寺からも宝船が発行された。図2がそれである。船腹には蜈蚣が描かれ、宝船はムカデ船の様相を呈している。ムカデ船は權を船の両腹に多数つけた船のことであり、早く進むのに特徴がある。船首には羽根を広げた鳥が描かれ、素早く宝を満載した船が来臨することを印象づける工夫がなされている。船内には三重塔、宝珠、樽、槌、米俵、天狗の団扇、帆には宝の字がある。鞍馬寺は五条天神社とともに、福徳を授ける聖域として厚い信仰を得てきた。

全国各地の大晦日夜や節分夜の宝船習俗は、多彩に展開してきたはずだが、実のところまだ解明されていない。室町時代には將軍家政所職を勤めた伊勢伊勢守貞孝が「節分御舟」を將軍家に調進したことが、將軍家同朋衆の沢巽阿弥が記した『沢巽阿弥覚書』⁽⁸⁾に記載されている。足利義輝が朽木より上洛した際には、義輝とその室には大引合の御

舟二つ、御曹子や御所々々様には小引、上臈、中臈、御末女には杉原紙に描いたものを貞孝が調進したという。戦国の世だからこそ、厄を払い悪夢を追放する「節分御舟」が重宝がられたといえよう。この図柄がどのようなものであったか不明だが、悪夢を見た時に備えて、「獏」という一字が記されていたかもしれない。禁裏から下賜される宝船には、後陽成院の筆になる「獏」の一字が記されていたと、近世の諸書にはみえる。たとえば『文晁画談』⁽⁹⁾には、「節分の夜に内裏宿直のものに給ふ宝船の画は、花園実久朝臣、獏字は後陽成院宸翰にて、絵文字とも宸刻なり」とし、また『嬉遊笑覧』⁽¹⁰⁾八の初夢の項には、「或人云、今内裏より堂上がたに賜る舟の獏字は、後陽成院宸翰を刻させ給ふとなり」と述べている。中世には船に獏の一字を書いていたものが、近世になると、船には宝が満載され、一方獏の字は船から独立して単独に「夢違い獏の札」となった。つまり白紙に獏の図や字を記した札を求め、これを宝満載の宝船と共に枕や布団の下に敷いて眠る習俗があった。獏の札と宝船が分離独立したわけだ。前述したように、宝船は年とともに宝貨、さらに七福神を登載するようになり、完全に招福のための呪物としての性格を強めていく。幕末の嘉永六年（一八五三）編の『守貞漫稿』⁽¹¹⁾二十六には、正月二日の項に江戸の民間習俗が七福神や宝尺の宝船になっていることを記している。すなわち

今夜宝船ノ絵ヲ枕下ニシキテ寝ル也 昔ハ節分ノ夜行ノ伊勢伊勢守、足利幕府進上之、將軍大引、其他小引、下ハ引合、末女ハ杉原、皆紙名也 今世禁裏ニ用ヒ玉フハ、舟ニ米俵ヲ積ムノ図也
 印板ノ民間ニ売ル者ハ、七福神或ハ宝尺等ヲ画ク 宝尺、丁字、打出槌、分銅、カク 京坂ハ近世廃衰ス、江戸ハ今モ専ラ元日二日ノ宵ニ、
 小民売之巡ル、宝船ノ印紙ニ、道中双六ノ印紙ヲ兼売ル、其詞曰、道中双六、オタカラ〜、今夜ノ夢ヲ初夢ト云、故ニ吉夢ヲ
 見ント宝船ヲシクコト也、

とある。江戸は二日夜初夢となっていた。

良い夢を見て目覚めた立春は陽気あふれる日と目されていた。立春大吉にして一年のスタートを切ろうとした。こ

の日丘に登ってわが家を見下すと、福を得るといふ習俗があった。文化三年（一八〇六）刊の『諸国図会年中行事大成』卷之一の立春の項に

今日立春に入の刻高き丘に登りて、我居宅を見下す時は福を得るとて、専ら丘に登るもの多し。京都にては清水寺の西門殊に賑はし。

と述べている。春めく山に登り、山の神や祖霊神を祀り、また山の靈氣を身につけて再生をはかることに源義があるが、いつしか右の記事のように福神信仰へと変容してしまっている。

第二章 ミロク世と蓬萊の国

儀礼や信仰をくりかえして、ささやかなユートピアの到来を期待した人々の願いも、仲々実現しない。そこで、この世のどこかに、あるいはこの世と連続した異界に理想郷があるのではないかという夢を描く。記紀神話には海上彼方に常世の国、天上に高天原、海中に海神の国があるとす。これら三つの世界は神々の原郷であり、明るい理想郷であり、黄泉の国や根の国という暗いイメージの世界とは対照的に描かれる。民間伝承では、山中深い所に時間性を異にする仙界があり、そこには貴種の人が住むという隠れ里伝説、あるいは『遠野物語』⁽¹²⁾に記されているマヨイガ伝説もある。沖繩には与那国島の人々が信じてきた「南の与那国島」伝説がある。すなわち与那国島の南方海上に、与那国島と同様の姿をした島があり、そこは豊かな理想郷とされる。

これら神話、伝説は日本人の理想郷待望観を示すものであり、また宇宙観を表わすものでもある。では神話、伝説の世界だけしか日本人は理想郷を想定することが出来なかったのであろうか。この世に理想郷を建設するような行動は見られなかったのか。近代では、大正七年に武者小路実篤が宮崎県児湯郡木城村字城に同志四十余名とともに建設

した「新しき村」が、その典型例である。近年の新興宗教の間で見られる道場建設もこうした運動に通じるものであり、古くは宗教共同体をめざした宗教一揆にもその理念は明瞭である。しかしその多くは挫折した。だから儀礼や信仰が一方で再燃する。

沖繩の八重山地方には、旧暦六月の稲の収穫祭にミロク踊りがある。右手に団扇、左手に杖、顔には大きな弥勒の仮面をかぶった者が村人とともに御嶽に行き、そこでミロク踊りをする。ミロクが村に稲の豊穰をもたらすとする信仰があり、豊年万作の世をミロク世とかミロク世界報という。仏教的には弥勒菩薩は五十六億七千万年後、今いる兜率天からこの世に下生して、衆生を救済する未来仏とされるが、民俗的なミロクは毎年毎年この世に來訪し、稲の豊穰をもたらすホトケともカミともみなされている。『黒島民謡集』⁽¹³⁾には八重山黒島の世界報口説^{くどき}が収められている。口説とは酒宴での祝い歌のことだが、その末の句に

今年弥勒の世界報年、廻り廻りて又來りば、五穀物作い満作に、粟のむい高竹の如さみ、穂ゆんちやりば一尺五寸、粒ゆ数りば三百三十七粒、あやびさ、ありが御初ゆ神に上げて、ありが御残い庫に積付、甘酒から酒たりくんちようてど、吹で遊で三三五五すしやんちや、又面白むんさみサツヤ

と歌う。今年は豊年万作の年で、五穀が満作となり、粟も竹のような高さに育ち、穂は一尺五寸、粒は三百三十七粒もある。出来た初穂を神に供え、残りを庫に積み、甘酒、酒をたくさん作り、飲んで遊んで面白くしようという意である。弥勒世界報の年とは五穀豊穰の年であり、それがささやかなユートピアの到来を意味するものであった。このミロクは、沖繩の人々の空想的楽土である海上彼方のニライカナイから來訪すると信じられていた。

ミロク踊りや世界報口説も儀礼や信仰の範疇内でしかない。では、この世に理想郷を建設するような行為や思想は、沖繩になかったのだろうか。ここで問題となるのが、風水思想^{ふうすい}である。沖繩には十六世紀以降、中国の影響をうけて、

風水思想が民間に浸透していく。風水思想とは、ほどよい風が吹き、ほどよい水が得られるような場所に、都城、村落、墓地などを設ければ、その都城、村落は栄え、またその墓の所有者の家は永続繁栄するという思想である。このことから、風水思想に叶った土地選択術が一方では重視され、風水師と称する占者が活躍することになる。基本的には東、北、西の三方が山脈に囲まれ、南方が開いていて、三方山に囲まれた内側の平野に川が北から南へと流れる状況が吉地とされ、この内側平野に都城、村落、墓地を建設すれば大変良いという。この思想の影響をうけて、十八世紀には、しばしば風水向上良くないという理由で移村した例がかなりある。理想郷建設のための移村とみてよいだろう。墓地の建設は現在でもこの風水思想が影響している。琉球王朝の首里城は、風水思想伝来以前に建設されていたと思われる。したがって風水思想伝来後、首里城の位置が良いか悪いか風水師が占った結果、大変良い場所という結果を下している。⁽¹⁴⁾風水思想は環境決定論であり、土地を自由に所有することの出来なかつた庶民の理想郷建設には、限界があつた。

死後の理想郷は西方十萬億土の彼方の極楽とするのが日本人一般の考えである。極楽の風景について、『阿弥陀経』には次のように説かれる。七重の欄楯、羅網、行樹があり、みな四宝で圍繞され、また七宝の池があり、八功德の水がその池に充滿し、池の底には金沙が敷かれ、その四辺は階道があり、金・銀・瑠璃・玻瓈の四宝で作られている。またその上には樓閣があり、金・銀・瑠璃・玻瓈・碑磔・赤珠・碼瑙の七宝で飾られている。池の中にある蓮華は大きな車輪のようであり、青・黄・赤・白色の蓮華はそれぞれに光り、微妙な香りをしている。常に天には衆がなり、地は黄金をなし、昼夜六時、曼陀羅華が雨のように降りそそぎ、その国の衆生は毎朝衣の端に多くの花を盛って、他方の十萬億土の仏を供養し、食事の時には本国へ還り、食事をし経行する。さらに白鶴・孔雀・鸚鵡・舍利・迦陵頻伽・共命の諸衆鳥が昼夜六時優雅な声で鳴き、その声は五根五力・七菩提分・八聖道分の仏法を述べており、この

国の衆生はこの声を聞いて仏・法・僧を思う。この国には三悪道はない。もろもろの衆鳥はみな阿弥陀で、法音を聞かせようとする。微風が吹くと、行樹や羅網が妙音を発し、それは百千種衆のような響きをする。この音を聞くものは、みな自然と仏・法・僧を思う心を生ず。阿弥陀の光明は無量で、十方国を照らし、障礙するところはなく、その功德はそこに住む人たちに無量に行きわたる。阿弥陀は成仏以来、十却におよび、その功德でそこに住む者はみな阿羅漢となり、また諸菩薩も住んでいる。

以上が『阿弥陀経』の説く極楽の風景である。阿弥陀、菩薩のもとに住み、阿弥陀の教えを聞いて阿羅漢となると説く。この阿羅漢こそ死者が極楽で変身する当体である。もし極楽往生を願うならば、七日間一心不乱に名号を唱えなさい、そうすると、臨終の時に阿弥陀や諸聖衆が現われて往生を得ると説く。

七宝の樓閣を中心にして、その周辺には輝やくばかりの池、階道、欄楯・羅網・行樹があり、池には四色の大蓮華が咲き、空からは曼陀羅華の花が降りそそぎ、靈鳥は鳴き、衆も聞こえ、地は黄金に輝やき、食事も満ちたり、阿弥陀の説経が聞かれる。これが極楽世界であり、それは極楽図に描かれて一般民衆にもよく知られた。日本人の死後の理想郷はまさに極楽世界であった。

では、生前ないし死後、この世の身近かな所に極楽的理想郷は考えられなかったのか。道教では蓬萊の国が仏教の極楽の世界に近いものとして想定されている。そして生前にそこへ行って帰ってきたという説話も多く生まれた。

中世の説話文学の華、御伽草子には異界を描いたものが数多くある。そのうちの一つ『蓬萊物語』⁽¹⁵⁾をここでとりあげる。同書には蓬萊山の方角、距離、景観を精細に記している。すなわち南海（南方の海上）三万余里の波頭を過ぎて、次の海として溟海があり、溟海三万里を過ぎると、蓬萊山の岸边に至る。この大山は六匹の大亀の甲により支えられている。一匹の亀の大きさは一万里におよぶ。蓬萊山の波打ち際より峯の岩に至る迄、水精輪の台の上にメノウ、

コハク、金銀白玉などが輝いている。人間界とは違った草木が繁り、花咲き捻っている。珍しい鳥獣が住み、角、毛、翼、鳴き声も天地五行の徳に従っている。

蓬萊山の天上には太清宮、太玄宮、太真宮という長生不死の大神王、天帝の都がある。ここに住む天仙、飛仙の者たちが、蓬萊山を見染めて天下り、住むようになった。十方諸国の仙人も蓬萊山に行き通い、楽しみを極めるようになった。かくして天仙、飛仙の神力により、宮殿樓閣が七宝をちりばめて自から出生した。

十二の玉楼、九重の玄室、その左には瑤の池、右には緑の池、池の中には五色の魚、さらに方壺、員嶠、閼風、玉圃という宮殿が軒を並べる。溟海の波の内に住む大蜃の蛤が、氣を吐くたびに五色の雲が空にたなびき、その雲の上に三つの宮殿がある。

あらゆる宮殿樓閣は淨らかで美しい。メノウの柱、コハクの長押、サンゴの欄干、黄金の垂木、真珠の瑤珞を掛けたステレ、水精の戸、タイマイの垣、ルリの瓦、さらに蘭麝、沈水の香も絶えることがない。庭には金銀の砂、池には八徳の水、池の水際に遊ぶ鳳凰、孔雀、迦陵頻、さらに花咲き、菓匂ひ、仙人たちは花にたわむれ、水に遊ぶ。楽を奏し、舞を舞う。四種の肉芝、五色の更梨、火棗、木瓜を食す。玉醴、金漿の酒を玉杯で飲み楽しむ。また栢梁台には五丈の旗鉞の先に白銀の盤を掛けて建て、この盤にたまった白露を練って糖となし、これで煉丹の君薬を作る。青霜、玄雪も延命薬となる。

さらに七宝をちりばめた長生殿、その前の不老門、長生殿前には八千歳を経た白大椿がある。長生殿には天帝が納めた不老不死の薬がある。それは黄金の台上のルリの壺に入っている。壺の前に花、妙香があり、八人の天仙が日夜番をし、不老門には十六人の鬼神が守衛している。薬のにおいは四方に香り、空には五色の雲がたなびき、天人が常に影向している。この薬を飲めば形は常に若やぎ、歳は傾くことなく、命も限りない。

以上が『蓬萊物語』に記された蓬萊山の姿である。南方海上六万余里の彼方に浮かぶ理想郷のイメージである。同書には紀伊国名草郡の安曇安彦という漁師が蓬萊山に行き、薬を得て日本に帰って帝に差し上げたという説話を記している。帰ってみると三百余年も立っていたと記すがごとく、異時間性を持った異界であった。しかし蓬萊山は死の世界のみではなく、生きた人間も行ける理想郷として描かれている。わが国では蓬萊山は常世の国ともみなされていた。常世の国は少彦名命が赴いた理想郷である。御伽草子の『不老不死』⁽¹⁶⁾には

今の世迄も、かの少彦の命は、此平安城に、跡をたれて、五条の天神と申す、年ことの節分の夜は、餅朮を出さるゝも、人の疫氣を、はらひ給ふ、ふ老ふ死のくすりの、かたはしなりとかや

と記す。五条天神社は少彦名命と結びつけられた、もっとも身近かな常世、すなわち蓬萊山とみられていた。

注

- (1) 折口信夫「妣が国へ・常世へ―異郷意識の起伏―」『国学院雑誌』第二六巻第五号 大正九年五月。『折口信夫全集』第二巻所収 昭和四〇年一二月 中央公論社
- (2) 黒川道祐『日次紀事』 谷川健一編『日本庶民生活史料集成』第二三巻(年中行事)所収 昭和五六年六月 三一書房
- (3) 速水春曉斎『諸国図会年中行事大成』 儀礼文化研究所編 昭和五三年一月 桜楓社
- (4) 本山桂川『日本民俗図誌』第四巻所収 昭和一八年一〇月初版 昭和五三年二月再版 村田書店
- (5) 橋本経亮『橘窓自語』巻一 『日本隨筆大成』一期四巻所収 昭和五〇年五月 吉川弘文館
- (6) 富田織部『三條家奥向恒例年中行事』 谷川健一編『日本庶民生活史料集成』第二三巻所収
- (7) 本山桂川『日本民俗図誌』第四巻所収
- (8) 『沢巽阿弥覚書』 『古事類苑』歳時部十三 年始雜載所収 明治四一年六月 神宮司庁 昭和五六年五月 吉川弘文館
- (9) 『文晁画談』 『古事類苑』歳時部十三 年始雜載所収
- (10) 『嬉遊笑覽』 右同書所収

- (11) 『守貞漫稿』 右同書所収
- (12) 柳田国男『遠野物語』 明治四三年六月 聚精堂 定本第四卷所収 昭和三八年四月 筑摩書房
- (13) 『黒島民謡集』 外間守善編『日本庶民生活史料集成』第十九卷(南島古謡)所収 昭和四六年一月 三一書房
- (14) 赤田光男「沖繩における風水信仰について」 鳥越憲三郎博士古稀記念会編『村構造と他界観』所収 昭和六一年一月 雄山閣出版
- (15) 『蓬萊物語』 横山重・松本隆信編『室町時代物語集成』第一二卷所収 昭和五九年二月 角川書店
- (16) 『不老不死』 横山重・松本隆信編『室町時代物語集成』第一一卷所収 昭和五八年二月 角川書店

(あかた みつお・帝塚山短期大学文学部教授)